

## 文科系2大学における2022年度入学生の 情報教育の履修に関する意識調査

篠 政 行\*

### Survey of the Freshmen in the Academic Year of 2022 on “Informatics Education” Provided by Two Liberal Arts Colleges in Tokyo

Masayuki SHINO\*

#### Abstract

In this paper, we have carried out questionnaire survey to freshmen about the consciousness of “Informatics Education” during high school days since 2010. We have continued to carry out this survey in the Academic Year of 2022 in the humanities departments in universities. As a result, it turned out that the students who do not have good PC environment tend to feel they are bad at PC skills from 0.9 times to 1.8 times as much as the students who have good PC environment. PC literacy and fundamental knowledge about PC have not developed as the teachers expected. In addition, according to the chi - square test relating to the presence/absence of PC, it was found out that there is a connection between the consciousness toward the operation of PC and about a word processor and spreadsheet, PowerPoint. But also it turned out that relevance is not seen at all. The result showed that the fields of weakness are different among two universities.

キーワード：情報教育、コンピュータリテラシー、意識調査、情報リテラシー教育

#### 1 はじめに

2010年度から2022年度の13年間に渡り駒沢女子大学と文化学園大学の文科系2大学の新入学生に対して大学入学前の情報教育に関する意識調査〔1〕〔2〕を継続して実施してきた。本稿では、2022年度に入学した新入生を対象に高等学校で学んだ教科「情報」についてアンケート調査を行った結果を報告する。これまでも、情報教育に関する調査報告〔3〕〔4〕は数多

くなされ、さまざまな分析が行われてきた。その中でも言われているように、高等学校で学習した教科「情報」の内容が必ずしも身に付いておらず、さらにはスマートフォンの普及と若年者のパーソナルコンピューター（以下PCと記す）離れにより、数年前に比べてもPCの操作スキルが確実に落ちているとも指摘されている。また、授業を担当している大学の情報科の教員には共通して実感するところとなっている。

---

\*人間総合学群 住空間デザイン学類

学習指導要領は概ね10年ごとに改定される。高等学校の「情報科」は2022年度からは情報教育に関して共通必修科目の「情報Ⅰ」と選択科目の「情報Ⅱ」に再編され両科目ともにプログラミング教育が含まれ高校生全員がプログラミングを学ぶことになる。

今年度の新入生は現行のカリキュラムで、「情報」に関連した内容を小・中学校から高等学校に至るまで、少なからず履修し大学入学以前には十分な情報教育を受け理解度も上がっているはずである。

しかしながら、現実的には情報の基礎的な知識に乏しい、あるいはPC操作スキルを持たないままの新入生がおり、またPCに対して苦手意識を強く持つ学生いる。つまり、PCに関する基礎的スキルを身につけるには高等学校の「情報科」では不十分であり、大学で通用するレベルには達していないことになる。新入生の苦手意識はどこから来るものなのかについて報告する。

## 2 調査方法

調査は2022年度の駒沢女子大学と文化学園大学の文科系2校に入学した1年生のみにリモート形式（Google フォーム）で行った。実施は2022年4月である。概要は次のようである。

### 2.1 調査対象

2022年度

駒沢女子大学	397名
文化学園大学	238名
合計	635名

### 2.2 調査方法

Web上の質問紙（記名式 Google フォーム）による選択式。

### 2.3 調査内容

まず、高等学校で学んだ「情報科」について、

- ①教科「情報」を高校の何年生で履修したか。
- ②情報の科目は何を履修したか。

次に、PCの利用について、

- ③PCが自由に使える環境にあるかどうか。
- ④PCの基本操作が得意であるかどうか。
- ⑤具体的な内容（タッチタイピング、ワープロ、表計算、プレゼンソフト）の操作や理解（習熟度）ができているか。

の5つの点について調査を行った。後半の③～⑤の項目についてはクロス集計〔5〕させながら解析を行った。

## 3 調査結果

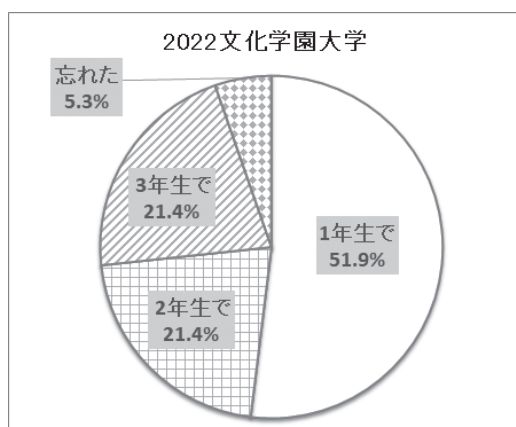
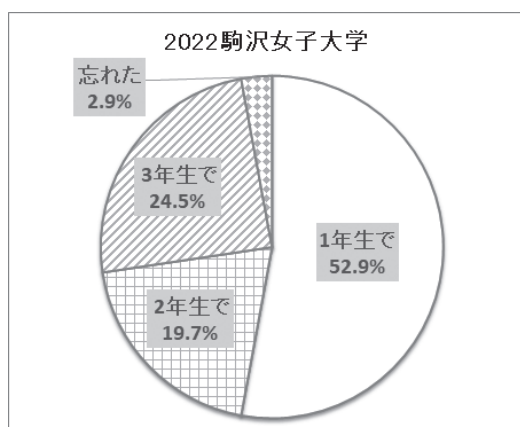
まず、高等学校で学んだ「情報科」について、どのように学んできたのかを調査した。

- ①『教科「情報」を高校の何年生で履修したか』について調べた結果を図1に示した。

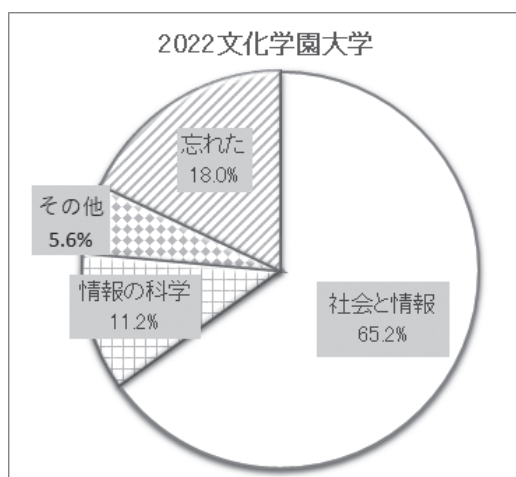
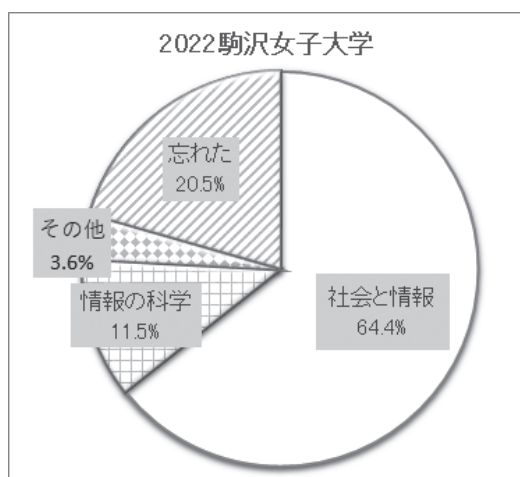
2大学で若干の違いはあるが履修の時期としては、1年次が50%強で、2年次・3年次が共に約20%となっていた。

- ②『情報の科目は何を履修したか』について調べた結果を図2に示した。

前述の履修時期の結果と同様に2大学で若干の違いはあるが、60%強の学生が「社会と情報」を履修していることがわかる。また、「情報の科学」は約10%となった。なお、新指導要領以前の科目名「情報A／B／C」あるいは「情報」と答えた学生もいた。実際には科目として存在するはずはないので、この回答には疑問があるが、それ以上に驚くのは「忘れた」学生が20%程度もいるという結果が出たことである。前述の履修時期の結果で約20%の学生が3年次に履修していることから、単純に考えると大学入学の直前に履修しているにもかかわらず、自分の履修した科目を「忘れた」ということにな



<図1>



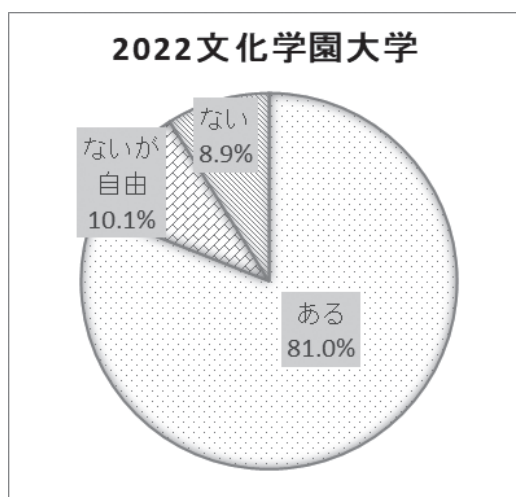
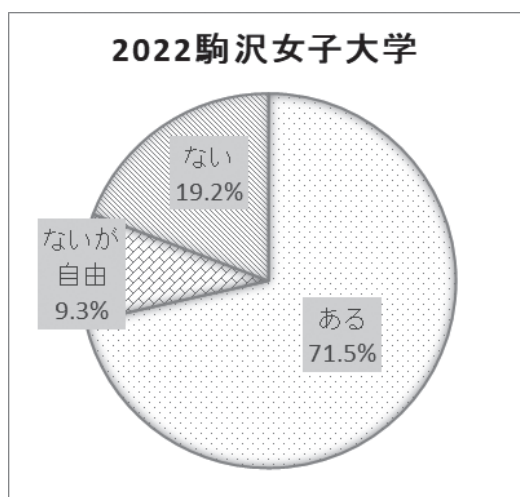
<図2>

る。このことは、教科または情報に対して実質的な授業が行われていないか、極端に印象の薄かった可能性が考えられる。どちらにしても、高等学校での「情報」を学ぶ「目的意識」や「意欲」の低下がこのような要因としてあげられると考えられる。実際には、1年次での受講が圧倒的に多いことで、その後の2年間のプランクが懸念されることから、依然として学生の情報の知識に偏りがあることが予想される。この結果は、調査開始の2010年度より引き続いて同様の傾向となっている。

つぎに、PCの利用の③『PCが自由に使える環境にあるかどうか。』について、図3に示す。

この結果も2大学で若干の違いはあるもののPCの個人所有率は約70～80%で、両大学とも「ないが自由」まで加えると約80～90%の学生はどうか自由に利用できる環境にあると回答した。なお、ここでの「ないが自由」とは「専用ではないが自由に使えるものがある」ことを意味している。

そこで、このPC利用環境③『PCが自由に使える環境にあるかどうか。』とPC操作が得



<図3>

意であるか④『PCの基本操作が得意であるかどうか。』の関係を調べた結果を図4に示した。

PCを所有する場合は、2大学とも得意と思っている学生、あるいはどちらともいえないと答えた学生は合わせて約60%程度であり、現状においてPC操作が得意であったり、得意と思わないまでも何とか利用していると考えられる。しかし、PCを所有していない学生で苦手であると思っている学生は、駒沢女子大学は約70%と文化学園大学は約30%の数字を示している。さらに、PCを所有していない学生の苦手意識は、PCを所有している学生が持つ苦手意識に対して、約0.9～1.8倍（駒沢女子大学は約1.8倍、文

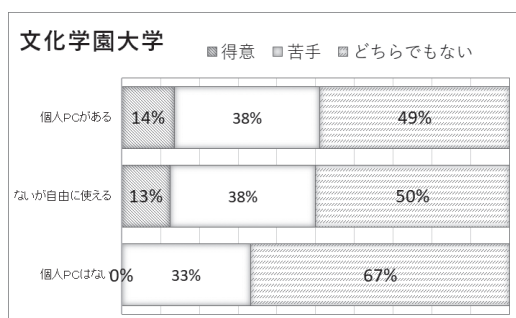
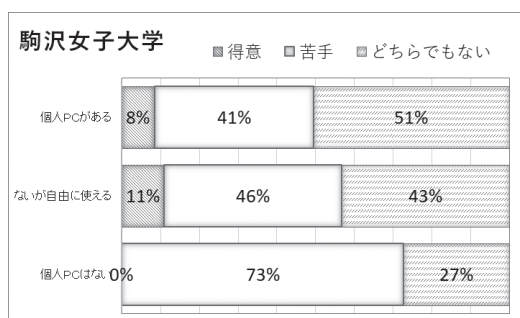
化学園大学は約0.9倍）である。

ここまでの調査結果は、2010年度からの調査結果のこれまでの傾向と大きな変化はない。

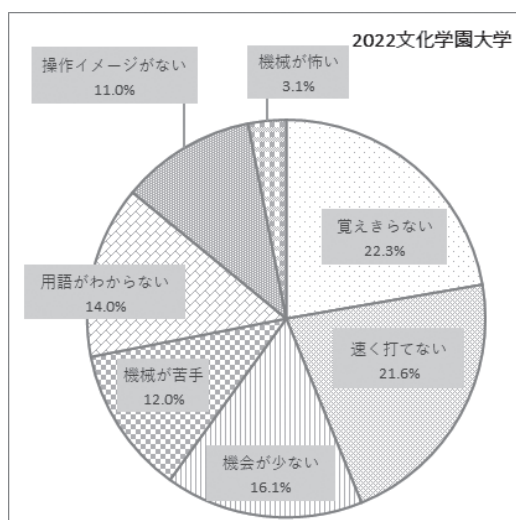
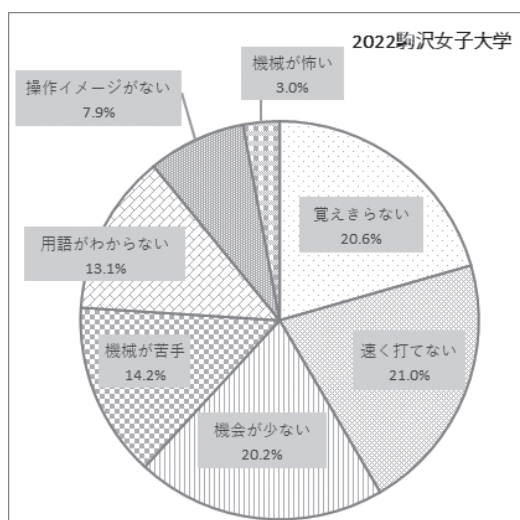
PCに対して、なぜ苦手意識を持っているのか、その理由を尋ねた結果を図5に示した。

なお、この図中の解答項目について、

- ・PCの操作を覚えきらないことを「覚えきらない」
- ・タイピングが速く打てないことを「速く打てない」
- ・用語の意味がわからないことを「用語がわからない」



<図4>



<図5>

- ・PCに触れる機会が少ないことを「機会が少ない」
- ・機械が苦手なことを「機械が苦手」
- ・PC操作の次のイメージがつかないことを「操作イメージがつかない」
- ・機械が壊れそうで怖いことを「機械が怖い」と表記している。

PCに対する苦手意識の理由は、2大学とも同様の傾向を示している。つまり、「PCの操作方法が覚えきれていない」のは「PCに触れる機会が少ない」ので「PC（機械）そのものが苦手」となり、「機械が壊れそうで怖い」となっていると思われる。そのため「用語がわからない」「操作方法のイメージを持つ」ことも難しくなっている。

次に、PC利用環境③『PCが自由に使える環境にあるかどうか。』と、それぞれ具体的な内容項目の操作や理解度（習熟度）⑤『タッチタイピング・ワープロ・表計算・プレゼンソフトの操作や理解（習熟度）ができているか。』の関係について調べた結果を図6～図9に示した。

この図中の解答項目については、大学入学時

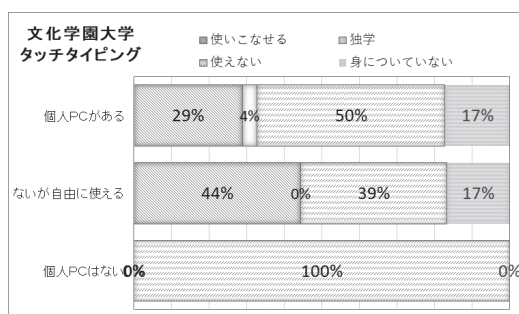
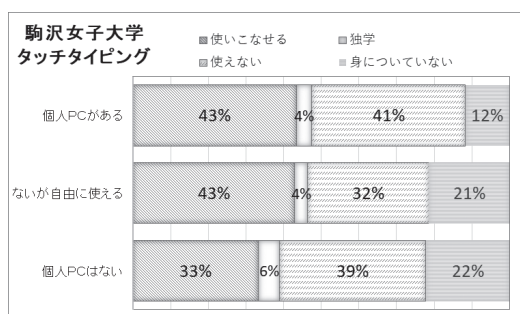
までに履修してきた高等学校時の教科「情報」を学んで、どのような意識を有しているかを次のように分類した。

- ・内容を理解していることを「使いこなせる」
- ・教科「情報」では学んではないが、その内容は他の教科や独学でマスターしたことを「独学」
- ・教科「情報」では学んではないし、その内容も理解していないことを「使えない」
- ・教科「情報」で学んだが、その内容は理解していないことを「身につけていない」と表記している。

まず、図6ではPC所有とタッチタイピングの習熟度との関係を示す。

タッチタイピングの習熟度は、2大学に顕著な差異が認められることがわかる。駒沢女子大学ではPCの有無によってタイピングを「使いこなせる」割合は40%台から30%台へと減少している。「使いこなせない」はPC所有の有無の違いでは、約40%台で変化はしていない。一方、文化学園大学は、PCの有無から無いでは、「使いこなせる」割合は減少し、「使いこなせない





＜図 6＞

い」は増加している。割合で示すと、さらに顕著な特徴が表れている。「使いこなせる」割合は約30%から0%と減少し、「使いこなせない」は約50%から100%へと増加している。

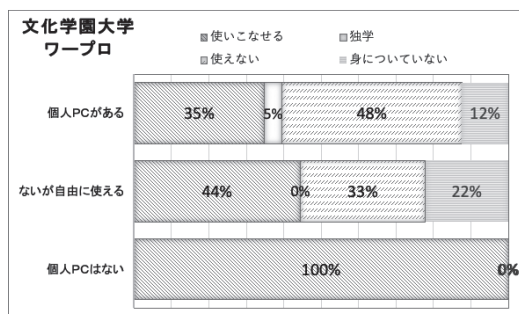
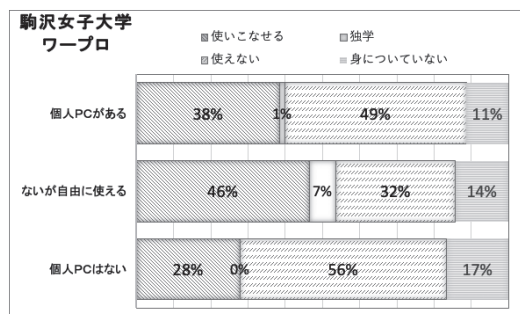
次に、図7ではPC所有とワープロ習熟度との関係を示す。

ワープロに関しては大学に入学する以前からその操作に習熟していると考えてきたが、両大学の共通の特徴が表れていることがあげられる。ワープロを「使いこなせる」はPC所有の有無で比較すると、「個人PCがある」から「個人PCはない」に向けて、駒沢女子大学は38%から28%と減少し、文化学園大学は35%から100%と増加しているが、「個人PCはない」の回答数が1人なので、データとしての信頼性に欠ける。また、「使いえない」はPC所有の有無による比較で、「個人PCがある」から「個人

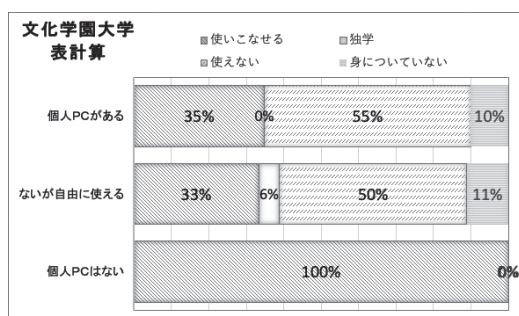
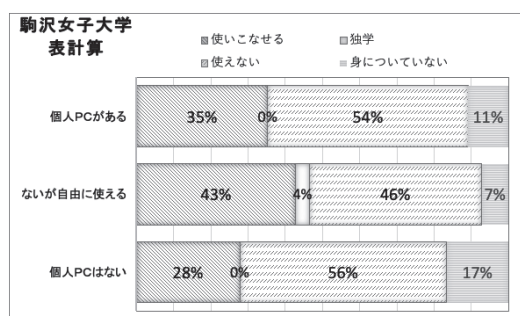
PCはない」に向けて、駒沢女子大学は49%から56%のプラス7%の増加、一方、文化学園大学は48%から0%と減少しているが、こちらも「個人PCはない」の回答数が1人なので、データとしての信頼性に欠ける。この結果から傾向としては、駒沢女子大学はPC所有の有無がそのまま習熟度の意識に反映されていると考えられるが、文化学園大学ではこの結果からは、一概に傾向を述べることは難しい。

図8の表計算の習熟度とPC所有の関係は、駒沢女子大学はワープロの習熟度と同様の傾向であり、文化学園大学は「個人PCはない」学生の意識だけの違いで、傾向としてはワープロ習熟度に近い。

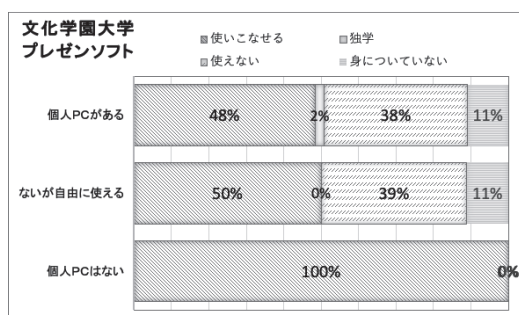
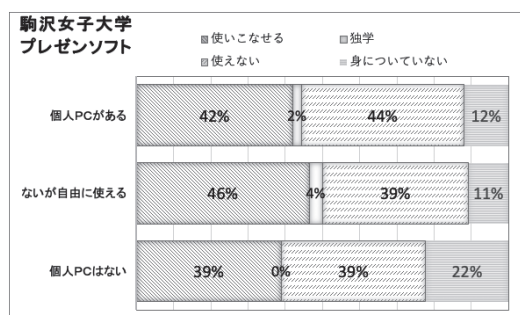
また、図9のプレゼンソフトの習熟度とPC所有の関係もこれまでと同様の傾向が現れている。つまり、「個人PCがある」から「個人PC



＜図 7＞



＜図 8＞



＜図 9＞

はない」に向けて、「使いこなせる」と「独学」を合わせて駒沢女子大学は35%から28%の減少、文化学園大学は35%から0%へととなっているが、これも「個人PCはない」の回答数が1人なので、データとしての信頼性に欠ける。

表計算とプレゼンソフトのそれぞれについて見ていくと、まず表計算の習熟度とPC所有の関係について、表計算の「使いこなせる」だけを取って比較すると、PC所有の有無の違いでは、駒沢女子大学は「ある」35%から「ない」の28%とマイナス7%、文化学園大学は、これまで同様データとしての信頼性に欠ける。PC所有の有無による変化が駒沢女子大学にはその影響は少ない。また、「使いこなせない」を比較すると、PC所有の有無の違いでは、駒沢女子大学は「ある」54%から「ない」の56%とプラス2%、つまり意識として「個人PCがある」学生は「個人PCはない」と比較し、「使いこ

なせる」であり、「個人PCがない」学生は「個人PCはある」とは、「使いこなせない」という至極まっとうな結果となっている。

一方、プレゼンソフトの習熟度とPC所有に関しては、プレゼンソフトが得意な学生はPC所有の有無によって駒沢女子大学は42%から39%の微減である。「使いこなせない」学生の割合は、駒沢女子大学は44%から39%の微減となりこれまでともに同じ傾向が見られた。

上述のように、ワープロ、表計算、プレゼンソフトの習熟に関する意識調査から、基本的なリテラシーを入学前に身につけてきていると思われるがちだが、概ね両大学に同様な傾向が見られた。PCの得手不得手もPCを利用する情報処理に対する「目的意識」や「意欲」の違いも考えられ、大学の専門性の違い同様に異なってくると思われ、一部に極端な形で両大学の違いが現れている。

さらに、2010年度から2022年度までを通してのデータを以下に報告する。

まず、「自分専用のPCの所有」について、その結果を図10に示す。

駒沢女子大学の2010年を除いて、両大学ともに、年を追うごとに「PCを持っていない」が増加している。このことは、スマートフォンの普及ほどの急激な増加ではないが、「使いこなせない意識」や「苦手意識」が年を追うごとに増加している因果関係は十分考えられる。

しかし、新型コロナウイルス感染症が拡大した2020年度からは、リモート授業等でPCを使用せざるを得なくなり、そのため傾向が反転し急

激に「PCの所有」が増加に転じた。この傾向が続けば、今後はこれまでの苦手意識に変化が生じることが期待される。

1)『PCの基本操作に関して得意と思っているかどうか』について調べた結果を<図11>に示した。

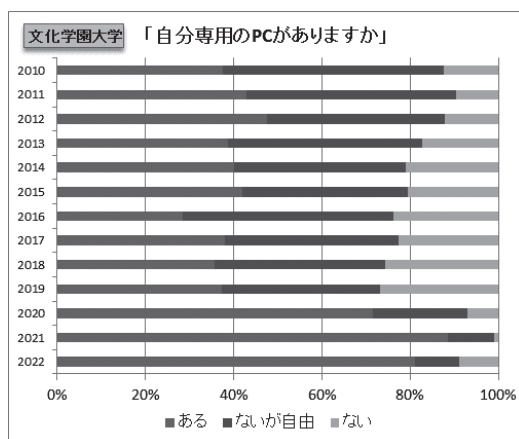
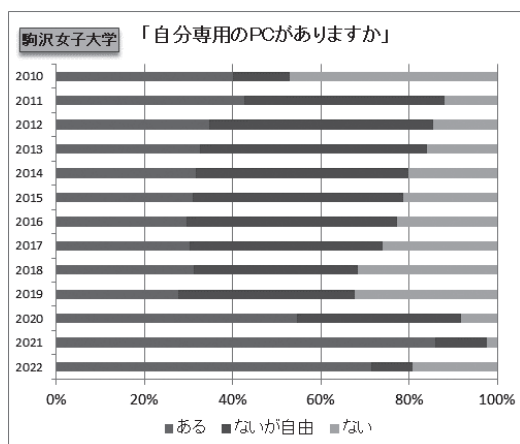
これらのグラフに近似曲線を当てはめると、苦手の意識について、

駒沢女子大学では、

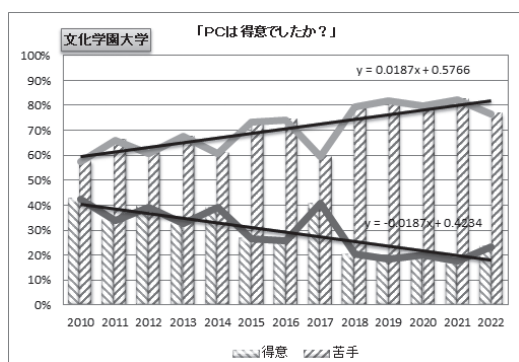
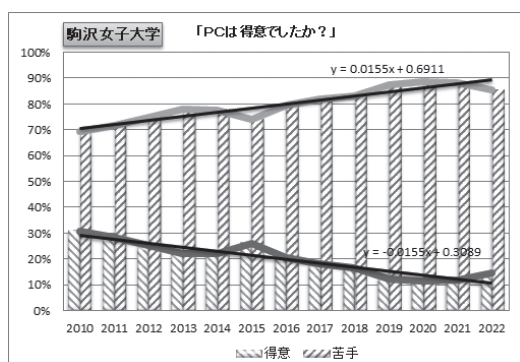
$$y = 0.0155x + 0.6911$$

文化学園大学では、

$$y = 0.0187x + 0.5766$$



<図10>



<図11>



正の勾配を持つことがわかる。

さらに、得意の意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0155x + 0.3089$$

文化学園大学では、

$$y = -0.0187x + 0.4234$$

負の勾配を持つことがわかる。

つまり、駒沢女子大学と文化学園大学ともにPCが得意であるという意識を持っている学生は年々減少傾向にある。一方、苦手であるという意識は増加傾向にある。2010年度と2022年度を比較すると駒沢女子大学では、「得意であるという意識」は16%ダウン（31%から15%）、「苦手であるという意識」は16%アップ（69%から85%）した。また文化学園大学では「得意であるという意識」は19%ダウン（43%から23%）、「苦手であるという意識」は19%アップ（57%から77%）している。この結果から、両大学とも同様の傾向を示している。

2)『キーボード操作』についての操作能力の意識調査を行った結果を<図12>に示した。

これらのグラフに近似曲線を当てはめると、  
できないという意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = 0.0075x + 0.8314$$

文化学園大学では、

$$y = 0.0118x + 0.7705$$

正の勾配を持つことがわかる。

さらに、できるという意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0075x + 0.1686$$

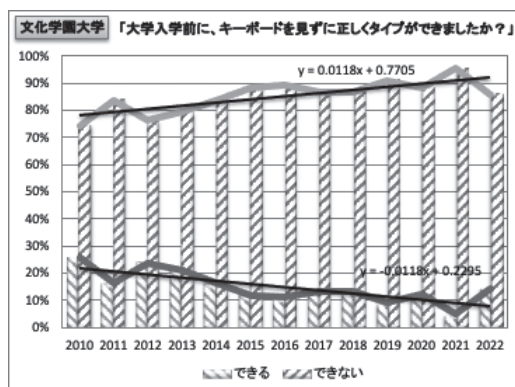
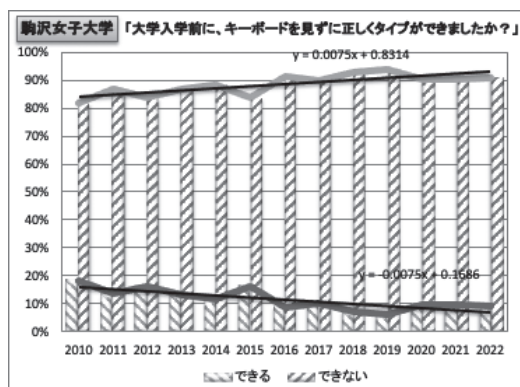
文化学園大学では、

$$y = -0.0118x + 0.2295$$

負の勾配を持つことがわかる。

つまり、駒沢女子大学と文化学園大学ともにキーボードを見ずに正しくタイプできるという意識は年々低下している。一方、キーボードを見ずに正しくタイプできないという意識を持っている学生は増加傾向にある。2010年度と2022年度との比較では、駒沢女子大学は、「正しくタイプできるという意識」は9%ダウン（18%から9%）、「正しくタイプできないという意識」は9%アップ（82%から91%）、また文化学園大学では「正しくタイプできるという意識」は11%ダウン（26%から14%）、「正しくタイプできないという意識」は11%アップ（74%から86%）している。この結果のように、両大学とも同様の傾向を示している。

次に、『PCの基本操作に関して得意と思っ



<図12>

ているかどうか』と『キーボード操作』および『Office 系ソフト（ワープロ、表計算、プレゼンソフト）』との操作能力意識の関係性を調査した。

3)『PCは得意でしたか』と『タッチタイピングの操作に関して、どうでしたか』との関係について調べた結果を<図13>に示した。

ただし、カイ二乗 ( $\chi^2$ ) 検定で、\*は5%有意 (\*:P<0.05)、\*\*は1%有意 (\*\*:P<0.01)を表す。以下、図14～図16もすべて同様である。

駒沢女子大学では、これまでの傾向として、PCが得意でも苦手でもタイピングが使いこなせるとする人の割合は上昇していたが、2020年度と2021年度は下降に転じ、2022年度はまた若干上昇した。文化学園大学は得意でも苦手でも使いこなせるとする人の割合は年度によってバラつきがあるので、一律な傾向はみられない。

そこで、これらのグラフに近似曲線を当てはめると、

得意という意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0037x + 1.0412$$

文化学園大学では、

$$y = -0.0313x + 0.9404$$

若干の負の勾配を持つことがわかる。

また、苦手という意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0195x + 0.4814$$

文化学園大学では、

$$y = -0.0139x + 0.4191$$

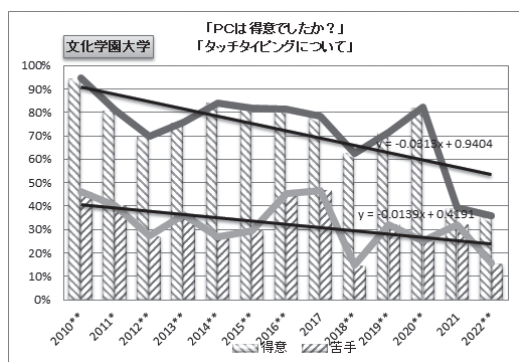
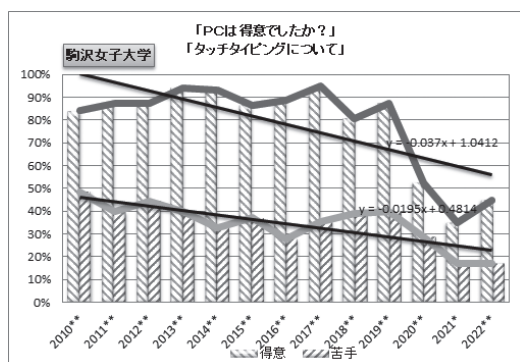
若干の負の勾配を持つことがわかる。

つまり、両大学ともにともタイピングができるという意識は低下の傾向を示していることがわかる。

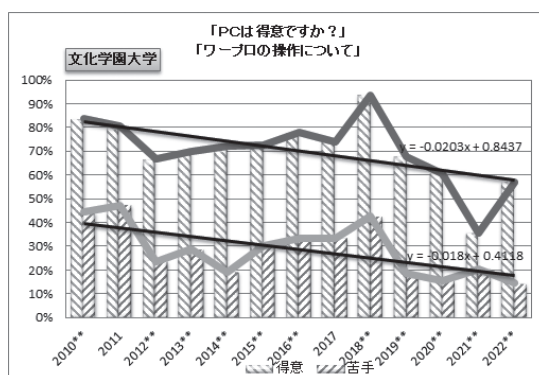
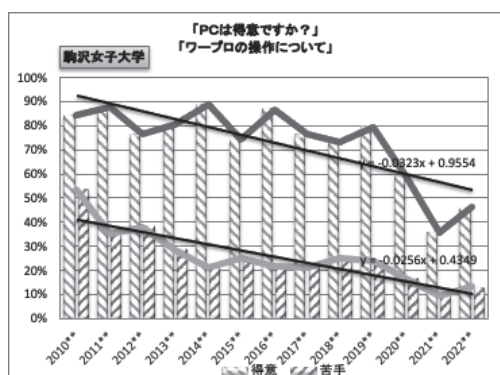
なお、文化学園大学の2017年度と2021年度の結果は相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

4)『PCは得意でしたか』と『ワープロの操作に関して、どうでしたか』との関係について調べた結果を<図14>に示した。

駒沢女子大学では、ここ数年苦手でも使いこなせるとする意識を持っている学生の割合は多少上昇しているが、得意で使いこなせるとする学生は年度によりまちまちである。一方で、文化学園大学は、PCが得意でワープロを使いこなせるとする意識を持った学生は年度によっては増加したように見えるが、近似曲線からは、得意という意識について、



<図13>



<図14>

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0323x + 0.9554$$

文化学園大学では、

$$y = -0.0203x + 0.8437$$

若干の負の勾配を持つことがわかる。

苦手という意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0256x + 0.4349$$

文化学園大学では、

$$y = -0.018x + 0.4118$$

若干の負の勾配を持つことがわかる。

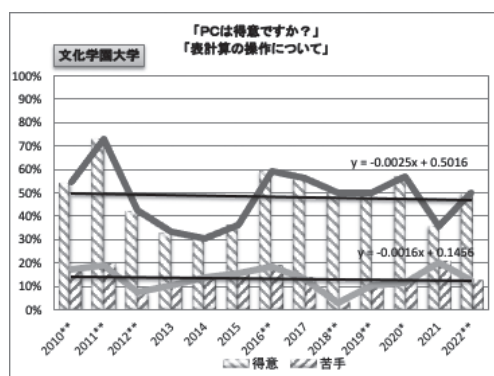
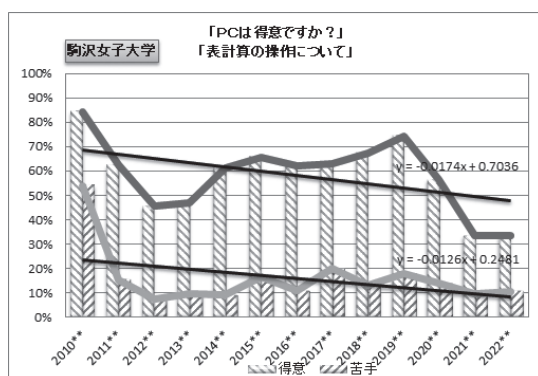
結果から、両大学ともにタイピングができるという意識は低下の傾向を示していることがわかる。

なお、文化学園大学の2011年度と2017年度の結果は相関の有意差が表れていないので、

データからそれを積極的に示唆することはできない。

5)『PCは得意でしたか』と『表計算の操作に関して、どうでしたか』との関係について調べた結果を<図15>に示した。

駒沢女子大学は、2010～12年度は減少傾向にあったものの2013年度以降は上昇傾向に転じていると推察される。文化学園大学は、2010～2011の調査開始当初は意識が上昇に転じ、現在また減少傾向を示している。得意や苦手に関わらず、使いこなせるという意識を持っている学生はほぼ横ばいである。ここでも、近似曲線からは、



<図15>

得意という意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0174x + 0.7036$$

文化学園大学では、

$$y = -0.0025x + 0.5016$$

若干の負の勾配を持つことがわかる。

苦手という意識について、

駒沢女子大学では、

$$y = -0.0126x + 0.2481$$

文化学園大学では、

$$y = -0.0016x + 0.5016$$

若干の負の勾配を持つことがわかる。

文化学園大学ではほぼ横ばいでは変化は見られないと考えられる。

ただし、文化学園大学の2013-2015年度と2017年度の結果は相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

6)『PCは得意でしたか』と『プレゼンソフトの操作に関して、どうでしたか』との関係について調べた結果を<図16>に示した。

駒沢女子大学では表計算との傾向と同様である。近似曲線は、

得意の意識について、

$$y = -0.0055x + 0.6381$$

ほぼ横ばいでは変化は見られない。

しかしながら、苦手の意識について、

$$y = 0.0021x + 0.1839$$

正の勾配を持つことがわかる。

一方、文化学園大学は、苦手を使いこなせる、あるいは得意で使いこなせるというどちらのケースの場合もともに、近似曲線の傾斜はプラスを示している。

$$y = 0.005x + 0.5715 \text{ (得意の意識)}$$

$$y = 0.0068x + 0.2002 \text{ (苦手の意識)}$$

この結果から、全体としてゆるやかな上昇傾向にあることがわかる。

両大学とも傾向として、使いこなせる意識がプレゼンソフトについては高いことが伺える。

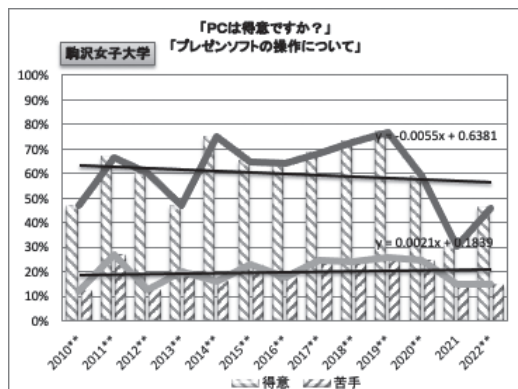
ここでも、文化学園大学の2016-17年の結果は相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

#### 4 調査データの統計処理(カイ二乗 ( $\chi^2$ ) 検定)

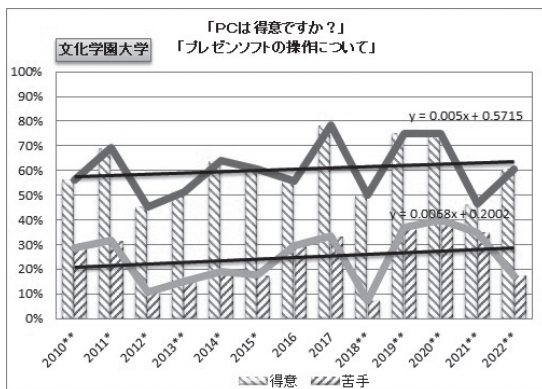
ここでクロス集計で得られたデータ間に確かに相関関係が成り立っているのかどうかの確証を得るためにカイ二乗 ( $\chi^2$ ) 検定 [6] を行った。

有意水準5%として、カイ二乗 ( $\chi^2$ ) 分布の上側確率 $\alpha$ を求めると、

1. PCの所有と得手不得手について、



<図16>





駒沢女子大学： $\alpha=0.051432>0.05$

文化学園大学： $\alpha=0.960317>0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PC 所有と得手不得手には関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PC 所有と得手不得手には関連があるとはいえない。」

2. PC の所有とタイピングについて、

駒沢女子大学： $\alpha=0.705242>0.05$

文化学園大学： $\alpha=0.757006>0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PC の所有とタイピングには関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PC の所有とタイピングには関連があるとはいえない。」

3. PC の所有とワープロについて、

駒沢女子大学： $\alpha=0.234274>0.05$

文化学園大学： $\alpha=0.561369>0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PC の所有とワープロには関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PC の所有とワープロには関連があるとはいえない。」

4. PC の所有と表計算について、

駒沢女子大学： $\alpha=0.106643>0.05$

文化学園大学： $\alpha=0.163931>0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PC の所有と表計算には関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PC の所有と表計算とは関連があるとはいえない。」

5. PC の所有とプレゼンソフトについて、

駒沢女子大学： $\alpha=0.869711>0.05$

文化学園大学： $\alpha=0.960590>0.05$

となるので、

駒沢女子大学では「PC の所有とプレゼンソフトには関連があるとはいえない。」

文化学園大学では「PC の所有とプレゼンソフトには関連があるとはいえない。」

以上の計算結果から、

1. PC の所有と得手不得手との関係は、駒沢女子大学と文化学園大学の結果はともに相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。PC が自由に使える環境にある学生とそうでない学生とは苦手の意識が同調しているとは必ずしもいいきれない。

2. PC の所有とタイピングは、駒沢女子大学の結果と文化学園大学の結果からは相関の有意差が表れていないので、所有とタイピング能力には関連はないと考えられる。PC の所有する学生と、そうではない学生ではタイピングの得手不得手の苦手意識はデータからそれを積極的に示唆することはできない。

3. PC の所有とワープロは、駒沢女子大学と文化学園大学の結果ともに相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

4. PC の所有と表計算の関係性は、ワープロの傾向と同様の推移で、駒沢女子大学と文化学園大学ともに、一概には相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

5. PC の所有とプレゼンソフトは、ワープロや表計算と同様な傾向がみられる。駒沢女子大学と文化学園大学の結果から、相関の有意差が表れていないので、データからそれを積極的に示唆することはできない。

つまり、PC を自由に使える学生と、そうではない学生の得手不得手の意識は、タイピングをはじめ個々のアプリケーションソフトについては、どれが得意で使えるかの意識は必ずしも定まっておらず、ここでも両大学ともに同様な傾向が表れている。



## 5 まとめと課題

本稿では文科系大学2校について、2022年度新入学生に対して情報教育に関するアンケート調査を実施した。その際、PCを自由に使える環境にある学生と、そうではない学生について調べた結果、約0.9～1.8倍（駒沢女子大学は約1.8倍、文化学園大学は約0.9倍）苦手意識をもっていることがわかった。

また、PCの所有と得手不得手との関係は、両大学ともに確かに関連がありPCが自由に使える環境にある学生とそうでない学生とは苦手の意識が同調している。これについては、カイ二乗( $\chi^2$ )検定の結果から関連があるとわかった。ここまでの調査結果は、2010年度より引き続きのこれまでの傾向と大きな変化はない。

スマートフォンの普及により、「自分専用のPCの所有」について両大学ともに、年を追うごとに「PCを持っていない」が増加している。そのため「使いこなせない意識」や「苦手意識」が年を追うごとに増加している因果関係は十分考えられる。

現状での新入学生にとって、スマートフォンの使用（主にSNSなど）は日常的に進む一方、PCの利用は限定的（主に授業など）であり、その使用頻度の差は大きくなりPC離れが加速されてきたため、これまで約10年間続けて調査をしてきた結果では、顕著な増加の傾向は見られなかった。

ここにて、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、PCの使用頻度は急速に高まり、政府主導の「GIGAスクール構想」[7]や2021年9月に「デジタル庁」が設置されたこと。また、高等学校では2022（令和4）年4月から、新しい学習指導要領が学年進行で実施され、共通必修科目の「情報Ⅰ」と選択科目の「情報Ⅱ」に再編され高校生全員がプログラミングを学ぶことになる。

さらには、2024（令和6）年度（2025（令和7）年実施）からの大学入学共通テストで新たに「情報」が試験科目として追加される。これを受けて国立大学協会では、同年度からすべての国立大学の「一般選抜」第一次試験として新たに「情報」を追加し、原則として6教科8科目に改めることを発表[8]したことなどから効果を期待して、今後入学してくるであろう新入生の苦手意識や「使いこなせない意識」が次年度以降、どのような傾向で変化していくのかをさらに継続調査し検討していく必要があると考える。

## 6 参考文献

- [1] 篠 政行, スワット・チャロンニボンワーニッチ:「2010-2021年度新入学生の情報教育に関する意識調査」大学ICT推進協議会2021年度年次大会（幕張）, FD4:情報教育, [FD4-5]（2021）
- [2] 篠 政行:「文科系2大学における2021年度入学生の情報教育の履修に関する意識調査」駒沢女子大学研究紀要, 第28号, 15-30（2021）
- [3] 神田久恵, 西荒井 学:「教科「情報」の修得内容と情報活用ツールについての実態調査-2006年度から2013年度までの新入生を対象として-」, 愛知淑徳大学論集-人間情報学部篇, 第4号, 2014年3月, pp. 47-61
- [4] 柴田雅博:「福岡県立大学人間社会学部における初年次情報リテラシー教育の効果」, 福岡県立大学人間社会学部紀要, 第29巻, 第2号, pp.179-190, 2021
- [5] 高橋武則, C. スワット:「質問紙調査の計画に関する研究」文化女子大学研究紀要, 第21集, 347/360, (JAN, 1990)
- [6] 高橋武則, C. スワット:「質問紙調査の

解析に関する研究」文化女子大学研究紀要,  
第21集, 361/376, (JAN, 1990)

[7] 「GIGA スクール構想の実現について」,  
文部科学省, (登録: 令和元年12月)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/  
index\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm)

[8] 国立大学協会: 2024年度以降の国立大学  
の入学者選抜制度: 国立大学協会の基本方  
針 (2022)

